

大学生の英語相互行為能力の考察 —グループワークの会話分析—

(University students' interactional competence in English: Conversation analysis of group work)

細田 由利／デビッド・アリン

この共同研究では、英語教室内のグループワークにおいて学生同士でいかにして第二言語(英語)を駆使してタスクをやり遂げるのかを会話分析を通して検証している。

過去数十年間、相互行為仮説 (interaction hypothesis) を通し、第二言語学習者に会話タスクを通して言語発信をする機会を与えることは第二言語での相互行為の促進につながると言われている。更に、研究者の中には第二言語での相互行為の機会を多くすることは学習者の第二言語習得につながると主張している者もいる (e.g., Long, 1981)。また他の研究者の中には、第二言語話者がいかにして会話資源を駆使して会話タスクを達成していくのかを示した者もいる (e.g., Markee, 1999; Seedhouse, 2003; Mori, 2001)。日本においても、学習者に第二言語での会話タスクを与えることの重要性が唱えられている。しかしながら、今日までグループワークにおける学習者の言語及び非言語行為を吟味した研究の大半は英語圏で行われており、日本の大学生を対象に行われた研究はまだ稀である。この研究では神奈川大学の英語の授業において、学生がグループワークで会話タスクを行う際に、いかにして言語及び非言語を駆

使してタスクを達成していくのかを詳細に渡って分析する。特に、会話分析の手法を用いて学生の第二言語における相互行為能力、文法能力、流暢さを明らかにする。

今年度は、(1) 本研究に必要な物資の調達、(2) 本研究実施計画を立てるためのミーティングの実施 (3回)、(3) 本研究に関連性のある分野の雑誌、本の購読、(4) 録音・録画・分析する2クラスの選択、(5) 上記で選択した2クラスにおける6グループ (1グループ4~5人)、計約6時間の録音・録画、(6) 上記データの詳細に渡る文字化及び分析、を行った。これまでの分析でタスク達成中のいかなる時に学生達が言葉の形式 (form)、意味 (meaning)、あるいはそれ以外 (周囲のノイズ、物質など) に志向するか、などについて非常に興味深い結果が見られ始めている。

来年度は、(1) 引き続き文献研究、(2) 録音・録画・分析するクラスの選択 (更に2クラス)、(3) 選択したクラスにおける4人のグループ、4グループの録音・録画、(4) 録音・録画したデータの文字化及び分析、(5) 分析結果をまとめた報告書 (論文) の執筆、を行う予定である。
